

ジョセフ・ヒコの異文化体験と帰国 (第4報)

山井 徳行

Sur les Expériences de la Culture Etrangère de Joseph HEKO et Son Retour au Japon IV

Noriyuki YAMAI

おことわり

この論文は、幼名を彦太郎といい、アメリカに帰化してジョセフ・ヒコとなった幕末の1人の漂流人の英語の自伝¹に基づいて彼の異文化体験を検証して、日本人一般の異文化体験への示唆を得ようとするものである。特に、第二言語習得の観点からその問題を考えている。

第1報の第1章ではヒコの生い立ちと漂流の事情を、第2章ではアメリカ人との接触と戸惑いを、第3章では日本語と英語の違いに戸惑いながら15歳の彦太郎がアメリカで生活する覚悟を決める瞬間までを年代順に記述した。

第2報の第4章ではアメリカでの生活の始まりを、第5章ではボルティモアでの生活を、第6章ではヒコの実社会体験を、第7章では帰国の準備とアメリカの市民権獲得を述べてきた。

第3報の第8章では日本への帰国の様子を、第9章では実兄との再会と故郷の印象を、第10章では幕末での活躍を、第11章では明治維新から彼の逝去までを自伝に沿ってまとめている。

以下はその続きであり、この論考の最終報告である。

第12章 ジョセフ・ヒコの異文化体験の総括

この論考は、異文化体験という概念さえも無かった江戸時代の末期にアメリカに漂着して、教育のある上流階級のアメリカ市民として日本に帰国、幕末の混乱期の中で薩長の維新の志士達と知り合い、日本の近代化に一役買った特異な人物、ジョセフ・ヒコの帰国の意味を異文化体験と第二言語習得の観点から考察しようというものである。

まず、自伝を通して主に見てきたヒコの異文化体験を分析してみよう。

異文化との接触によって自分の文化に疑問を持ち自己の土台が揺れ内的葛藤に悩むという、いわゆるアイデンティティの危機をヒコが体験したという形跡を自伝の中から読み取ることはできない。仏教が禁じている肉食に関して多少の抵抗があったが、「郷に入れば郷に従え」式にあっけなく解決されているし、サンダース夫人によって強制されたミルクの摂取という儀式を経ると、ミルクを生涯の好物とするようになった。帰国のときの方便としてアメリカ国籍を取得するときにほとんど疑問も逡巡も示していないのは、鎖国政策ゆえに身に降りかかる災難を防止するためだとしてまだ理解もできるが、カトリックの洗礼を受けて改宗したことはその

ように説明できない。自伝の中でも改宗の事実が淡々と述べられているだけで、キリスト教的な神への深い帰依への言及もない。熱心な信者であったサンダース夫人の勧めで洗礼を受けているのであるから、当時のアメリカの上流階級の青年と同じように習慣に従ったと言っていだろう。

寺子屋で勉強中であった13歳の少年は日本人としての自我が確立されていない状態で難破し漂流した。そして圧倒的な力を持つ当時のアメリカ文明の中に投げ出された。その異国で自分の力で生きていかななくてはならないという悲壮な決意と共に顕在化したヒコの自己意識は文化的な葛藤に係わりあっているような余裕が無かった。異国で一人で生きていかななくてはならなかった漁師の次男坊はアメリカ文化への同化という道を選んだのだろう。サンダース氏という恩人の出現はこのヒコの同化を容易にし、励ました。短い間とはいえ正規の教育を受けさせ自分の家でマナーなどの立居振舞の家庭教育を施した。サンダース夫妻からしてみればカトリックへの改宗やアメリカの市民権の獲得はそのようなヒコの教育の仕上げであったと、推測してもそれほど誤りではないと思われる。

異文化への同化は簡単なものではない。英語の習得やアメリカの文化への順応は困難な修行のようなものだった。彦蔵は幸いにして若く才気があり、周囲の人間たちから厚遇されるような気質の持ち主だった。そこに幸運な出会いがあった。

アメリカ文化に順応しアメリカ人の青年として自信に満ちて帰国したヒコを実の兄が分からないのも無理はない。単に成長したとか服装が西洋風だとかいった問題ではなくヒコの行動様式や表情が日本人のそれではなく、アメリカ人のそれになっていたのだろう。ヒコの故郷に対する幻滅については前述したが、アメリカ人化したヒコは好奇の目で見られた。滞在先でヒコが風呂を使っていると、「毛唐とはどんな人だろうと、村人がこわごわ、珍しそうに、のぞきに来た」話がよくされたそうだ。

また、ヒコと付き合いのあった人たちの証言によると、日本に帰ってきたヒコは、英語は読み書きにおいてアメリカ人と変わらなかったが、日本語の知識は貧しく手紙等も英語で書いたという。それなのに日本初の新聞、『海外新聞』を発刊して歴史にその名を残したのだが、実際の記事は他の日本人に任せたとするⁱⁱ。

自伝にはヒコの写真が載っていて、その風采の一端がうかがわれる。証言によると風采もすっかりアメリカ人そのものであったと言う。東京のヒコの家を買うことになった英文の泰斗、高島捨太氏によれば、「ヒコとは濱田彦蔵氏の事で、長く米国に居り、米国に帰化したのでアメリカの彦蔵といはれ、アメヒコで通っていた。(中略) 会って見ると体格の大きい立派な人で、始めから終わり迄英語のみで話す。実に立派な英語で、米人そのままである。其の後の書面の往復も英文のみである。英文は達者なものである。晩年は神経痛で苦しんでゐた。彦蔵氏は衣食住すっかり米国風で話は英語、書く文は英文、洋館に洋服、全く米人であった」ⁱⁱⁱという。

ヒコは周囲の人間には自分はアメリカ人であると積極的に主張していたように思える^{iv}。彼の日本語の読み書きが帰国時に多少貧しいものであったとしても、維新の志士達にアメリカの文明を得意になって説明したのは当然、日本語であったろうし、日本で生活していれば日本語の環境に居るわけだから、日本人の来客と英語のみで話すのはそこに彼の意図を読み取るべきである。

注意しなければならないのは、日本人は留学などして外国語が流暢になった者を過剰に評価する傾向がある点である。その意味で上記の証言なども多少割り引いて解釈する必要がある。現代の第二言語習得の理論から見ると、13歳以降から英語を学び始めたヒコがどれほど英語の

達人になろうとも日本語の訛り（アクセント）を完全に払拭することは不可能とされている。

ただヒコにとって英語が日本語よりもより、少なくとも同じほど、使いやすかったことは確かかなようである。自伝も英語で書き、日本人に翻訳を頼んでいる。

ヒコの日本語能力に関して、一つの疑問が湧く。13歳以降は日本語の文字を学ぶ機会を奪われ、アメリカで教育を受けるなどして英語で生活するほうがより楽になっていたことを認めた上で、帰国後に文字を勉強して日本語能力を上げることができなかつたのかという問いである。ヒコは22歳で帰国しているし、何しろ日本語は母語である。母語である言語に関しては、言語の音に関する要素、音韻・イントネーション等に関して人は特別な能力を持つ。外国語学習と比較して聴解や発音において特権的な能力を持つのである。それを意識的に学ぶ必要が無いのが母語なのだ。表記は人工的なので学校などで学ばなければ、いわゆる文盲になる。

実際、帰国後直ぐに出版した『漂流記』において、日本語の読み書きを学んで日本人に戻りたいという希望を表明している。1863年のことで、日本人に筆記して出版したものだ。ヒコは26歳になっていた。アメリカ領事館の通訳の職を辞し横浜で貿易の仕事をした時期であり、将来の生活の不安などにも言及している。不安定な時期で多少感傷的になって書かれた文章であり、アイデンティティの危機と考えることはできないと思う。ここで問題としたいのは、日本語の読み書きを学びたいと帰国直後に感じそれから38年間も日本で生活しながら、世間では英語中心の生活を送ったという事実だ。明らかにヒコはアメリカ人であることを選び取っている。

この自伝の中で日本の風物や衣食住への強い関心が示されることはほとんどない。熱い風呂に入りたいという希望を親しくなった商人にかなえてもらったというくだりがヒコの日本人的な側面を見せているくらいである。

ヒコは40歳くらいのときに松本銀子という日本人女性と結婚している。彼女との家庭生活では日本語を使っていたという⁵。それは妻が英語を話さなかったという単純な理由によるものかもしれない。ただ、アメリカ人性を前面に出して公的な仕事や付き合いをしても、家庭では母語で寛ぎたかつたのかもしれない。後者の解釈が筆者には説得力を持つ。ヒコはアメリカ人か英国人の女性を妻に迎えることも当然できた筈なのに、ヒコに関する証言を見ればそのほうがより自然に感じられるのに、結婚相手は日本の女性であった。この事実が端的にヒコの心情を反映していると思う。

ヒコの異文化体験に関して結論を述べよう。ヒコのアメリカ体験はヒコがアメリカ人に同化する体験だったのであり、アメリカという当時の上位文明によって少年の中に育ちつつあった日本人のアイデンティティは阻害され吸収されてしまった。ただ、日本人性の核をなす日本語能力はその有用性ゆえに維持された。ヒコのアメリカ人に同化する試みが完全に成功したと主張しているのではない。移民研究で指摘されるように、移民一世の同化の試みは普通は中途半端に終わる。

ヒコの異文化体験は積極的な同化の過程であったという結論を考慮しながら、ヒコの「帰国」の意味を考えたい。

第13章 ヒコの帰国について

ヒコの日本への帰国は、第6章で説明したように、サンダース氏に紹介されたグイン氏によ

る就職運動がうまくいかず途方にくれていた時期に決定されている。帰国の旅は友人をとおして得た働き口でもあった。さらに旅の途中で、日本の開国ということもありアメリカ領事館の通訳としての職を得て帰国した。

この時期のヒコの望郷の念が強かったのはよく理解できる。13歳にして乗っていた船が暴風雨のために難破して異国に流れ着き、9年もの間さまざまな苦勞をした青年が故国や故郷を懐かしむのは人間として当然であろう。またこれも重要なことだが、当時の漂流民が帰国の際に遭遇する鎖国政策による身の危険はアメリカ市民になったことによって回避された。自伝の中でも、日本に到着して周囲で日本語が話されているのを聞くとヒコは日本語を話したい誘惑を強く感じたことが行間から読みとれる。アメリカ人然とした自分が自然な日本語を話すことに驚嘆した日本の役人の驚きを描写するヒコの筆は冴えている。

帰国後、ヒコはアメリカ側の通訳として、時にロシアのためにも働いていることから、西洋列強の人間として幕末の歴史に深く係わり始める。22歳の青年にとってこれはやりがいのある仕事に相違なかった。攘夷派の浪人らに命を狙われる危険は確かにあったが、それは青年の冒険心を高め生き甲斐を強めただけであろう。

下関事件や薩英戦争をへて尊攘派が次第に開明派へと変貌していくと、木戸孝允、伊藤博文といった勤皇の志士たちから相談を受けるようになる。ヒコは当時アメリカ領事館の通訳の職を辞して長崎で貿易業に従事していた。ヒコが官から民に投じていたことや、アメリカ市民といっても日本人として生まれ13歳まで日本にいて日本文化の知識や日本語の能力が外国人の通訳と比べて格段に優れていたことが、西洋文明の伝達者として特別な位置を占めるに至ったことは想像に難くない。ヒコに対して興味を持ったのは彼らだけではない。備前藩主や姫路藩主がヒコを招き外国事情を家臣に講演させる様子は自伝の中でも生き生きとしている。このような厚遇を受け人脈を築いたことはヒコにとって自慢したいことだったのであろう。

幕末から維新にかけてのヒコは自分の英語力やアメリカ体験の日本における社会的な意味の重要性に気付き自信を深めていた。日本への帰国はヒコにとって大成功だった。

ジョセフ・ヒコは帰国して活躍したのに、それが大成功だったなどと評価するのは、ヒコには帰国せずにアメリカで一生暮らすという選択肢もあったことを示したいからである。サンダース氏という社会的地位の高いアメリカ人に気に入られ、まるで実の息子のように扱われた貧しい漁師の息子が日本より文明が数段も進んだアメリカに永住したいと思っても別に無理はない。漂流したときすでにヒコには両親が居なかった。

実際、サンダース氏の銀行が破産せずにヒコにより充実した教育を施すことができたなら、またグイン氏の気まぐれな申し出を受けずにサンフランシスコの商社で働き続けていたら、鎖国政策ゆえに漂流民が帰国することが危険であることがよく知られていた日本に戻らずにアメリカの豊かな生活を選び、まったくのアメリカ人としての生涯を送っていたかもしれない。現代でも豊かな生活を求める経済移民は世界中に満ちている。ヒコがそのような一人であったとしても少しも不思議ではない。

我々日本人は誰でも日本に帰りたがると頭から思い込んでしまうところがあるが、それは島国という特性と長い間、異民族と交流がない鎖国状態であったために醸成された一種の偏見だと思う。日本人が他の民族より愛国心が強いと思ひ込む根拠はどこにもない。国内であろうと外国であろうと人間が移住するのは経済的な理由がまず優先する。例えば、日本における戦後の高度成長期に見られた人口の都市への集中や現代の地方の過疎化はその最たるものだろう。もちろん経済的な理由以外にも、治安、生活の快適さ、文化的順応性、情報アクセスの難易度

や人間関係など多くの要素があり、それらを考慮して個人は自分の生き方を選択してゆく。

ヒコの話に戻ろう。サンダース氏が破産しヒコが失業状態で途方にくれていたときに給料を貰いながら帰国するチャンスがやってきた。さらにアメリカ人になることによって日本当局から咎めを受ける危険を回避することができた。領事館通訳として働くことはアメリカへの恩返しという意味ももっていた。故郷は遠くにありて想うものだとすれば、アメリカの地で望郷の念に悩まされていたに違いない。また時代の動乱が青年の冒険心を刺激したとしても不思議でない。なにしろヒコは弱冠22歳であった。

日本に帰国したヒコの活躍はこの論文で詳細に検討してきたし、自伝の骨格をなしている。帰国しなかったならば、アメリカ彦蔵は存在しなかった。ジョセフ・ヒコとしてアメリカで平凡ながらそれなりに幸福な一生を過ごしていただろう。

第14章 結論—もう一つの「帰国」について—

ヒコは1859年に6月に日本に帰国し領事館の通訳として働き始めたが、翌年の2月に領事館を辞めて3月に横浜で貿易商館を開く。そして、1961年9月に再度アメリカに渡る。それは攘夷派の志士によって暗殺の標的の一つとされ、その危機が切羽詰った時期でもあったので、まずは身の安全を確保したいと思ったためであったが、以下のような理由もあった。

At the same time I had some idea of making a visit to America, partly in order to take some presents to my friends who had been so kind to me during my sojourn in that country; and partly to obtain the post of U.S. Naval store-keeper, inasmuch as this position would entitle me to gold bands on my cap and so place me on an equality with the native officials. (*The Narrative of a Japanese Vol. I. p.278*)

このアメリカ再訪の際に、サンダース氏始め多くの友人と再会し、その人脈をたどってリンカーン大統領との会談が実現する。ヒコは日本政府から派遣された者の資格でアメリカ大統領に会ったのではなく、一人のアメリカ市民として自分が築いたアメリカ人の友人達をとおして就職運動をしているうちに自然と当時の最高権力者に会うことになった。このことには何度も触れたが、ヒコのアメリカでの社会的な地位の高さと安定度を示していると思う。ヒコは信頼できる多くのアメリカの友人を持っていたのだろう。

この時期に、ヒコに一つの災難が降りかかる。南北戦争の最中であったアメリカで南軍の將軍と間違えられて逮捕されたのだ。幸いに疑いは直ぐに晴れたが、逸話が残った。一つ目は、ヒコ逮捕の現場に居合わせた二人のアメリカ人の友人が2万5千ドルの保釈金を積んでヒコを釈放した事実である。ヒコは私にそんな価値があるのかと冗談をいいながら笑ったと自伝にある。二つ目は、ヒコの帰国に貢献し咸臨丸の水先案内人としてアメリカに帰っていた海軍兵学校出身の海洋学のパイオニア、ブルック(Capt. Brooke)に関するものだ。フロリダ生まれのブルックは日本から帰国して南軍に投ずる。ヒコの二度目のアメリカ滞在のとき、ブルックはブルックガンという大砲や世界最初の甲鉄船メリマック号の建造などで活躍していたという。アメリカに到着次第、南北戦争の新聞記事をむさぼり読んだヒコがブルックの活躍を知り会おうとしたとしても不思議はなく、そのようなヒコの動静が南軍のスパイの嫌疑を生んだのではないかと、近藤晴嘉氏が『ジョセフ＝ヒコ』の中で述べている^{vi}。この逮捕事件の顛末を叙述する日記に、ブルックの建造したメリマック号が北軍の軍艦を沈めた、とあるのは近藤説を裏付

けているように思われる。

ヒコとブルックの関係は単なる友人同士の域をはるかに超えていた。ブルックが海洋測量船クーパー号で太平洋岸の測量に出たときに、ヒコをハワイまで乗せて辛苦を共にしている。ヒコがひどい船酔いのためにいったんホノルルで別れるのだが、ヒコの帰国を整えたことに変わりはない。

ブルックが日本に到着したときには再会している。そして、ヒコの自伝の中でも特に感動的な事件が起こる。3ページにも及ぶのですべてを引用することが出来なのが残念である。

In the latter part of July the schooner Fennimore Cooper arrived from her cruise, all well on board.....The Consul invited Capt. Brooke to dinner on the following evening.....At the dinner a peculiar incident occurred. In the course of the conversation the Consul asked me how I had got along after I left the protection of the U.S. Government at San Francisco. I told him that I had some friends on board the cutter who took care of me. He then wished to know who was the commander of the cutter and I answered "that unprincipled man H-----," or word to that effect. Upon this the Consul said: —

"Now, Joseph, don't speak of that Captain in that way. He is my friend, and if you dare to repeat such words at my table again I'll kick you out through that door!"

I replied that I was sorry that he was the Consul's friend, and that I was merely expressing my private opinion of the man based on his treatment of me whilst I was on board his vessel, and asked if I had not a perfect right to express my opinion of a man who had decidedly been no friend to me.

"No, you have not,---not in that way "said the Consul.

At this point my friend Capt. Brooke took the matter up. "Mr. Consul" he remarked, "you said that Capt. H. is your friend. What Mr. Heco said about him was only the expression of his private opinion. Yet you say that if Mr. Heco repeats such language again you will kick him out through that door. Now, I am a friend of Mr. Heco's, and I should just like to see you dare to do it."

.....

.....While this hot discussion was in progress a pig's head came on the table. The Consul took up the knife and fork and began to carve. And as he did so, he said: —

"If any man dares to interfere with my business at my table, I should just like to shoot him right across this pig's head!"

This the Captain chose to regard as a challenge. So he first flushed up, and then he grew very white and very stern and he said very quietly, but at the same time with a cold hard ring in his tone: —

"General D., I accept that challenge. Choose your weapon and step outside!" (The Narrative of a Japanese Vol.1,pp.217-219)

同席していたヴァン・リード (Van Reed) やヒコがブルックを慰め、怖気づいた領事が冗談で言ったのだと座を取り繕ったので決闘に至らずに済んでいる。

この逸話はヒコとブルックの友情の強さを示していることは当然だが、名誉と命を賭けて自分の主張をするヒコのアメリカ的なメンタリティをも示している。さらに、そのようなヒコをブルックはアメリカ人として全面的に受け入れたと解釈できるだろう。この事件が起こった翌

年にヒコが領事館を辞して貿易商館の経営を始めた。領事とヒコの間がギクシャクしても不思議ではない。それからさらに一年半後にアメリカに渡ったヒコが南軍に加わって闘っているブルックに会うためにスパイと間違われてしまうような行動を取ったとしてもこれも不思議ではない。それほどにヒコのブルックに対する信頼と友情が強固なものだったことを示していると思う。ただ自伝には特に触れられてはいない。

この挿話を重要だと考えるのは、12章でヒコのアイデンティティの問題に関して考察したが、ヒコが文化的にも精神的にもアメリカ人として成長し振舞っていて、それが多くのアメリカ人の友人たちによって自然に認められていたことをよく表現していると思うからだ。ブルックとの出会いと交情により、ヒコは名実共にアメリカ人になることに自信を深めたのだろう。ブルックは南北戦争のあとで物理学と天文学を教えたという^{vii}。

11章で説明したように、1874年に大蔵省を退いたあとのヒコの経歴は途端に色褪せてくる。お茶の輸出や蒸気式精米機などに手を出すわけだが、成功したわけでもないし特に熱心に事業に打ち込んだという感もない。ヒコはまだ37歳の働き盛りである。日本の西洋化も徐々に軌道に乗ってきて英語に達者なものも出てきた。国籍がアメリカ人ということもあって政府筋から少し疎んじられたのだろうか。それにしても、ヒコが世話をした勤皇の志士たちは明治政府や実業界の中で絶大な力を持っていた筈である。伊藤博文、木戸孝允、井上馨、五代友厚そして渋沢栄一などである。アメリカの政治や商業に明るい筈のヒコがこの人脈を使えば少なくとももっと活躍できたのではないだろうか。ヒコ研究者の間でも取り上げられる疑問らしい。ヒコの潔癖な性格や国籍で説明したりしようとしているが定説はないようだ。ヒコが落魄したような晩年を過ごしたという事実が残っている。

するとここで一つの疑問が浮かび上がる。1874年に大蔵省を辞したあたりからアメリカに帰国しようという考えがヒコを捉えなかったのか、という疑問である。

もう一つの「帰国」の問題である。

もっとも、自伝にはそのような思いは全く窺われない。一言も言及されていないし、アメリカに対する望郷の念も語られていない。洋行した人間が留学先を懐かしむような記述もないので、ヒコの感傷を好まない個人的な資質なのかもしれない。そうすると日本の社会での将来に余り期待が持てなくなったとき、アメリカに帰りたいという想いがヒコの心を過ぎたと仮定することはそれほど突飛なことではない。アメリカへの帰国という仮説を立てると、それを補強するような要素が浮かび上がる。列挙してみよう。

- ① ヒコはアメリカの市民権をもっているので「帰国」には全く問題がない。日本人にとって外国（アメリカ）で働いて生活する権利は手に入れようとしても簡単に手に入らない特権であった時代を考慮するとき、その魅力を軽視すべきではない。
- ② ヒコはアメリカ人としてアメリカに同化することを選択している。そして、英語力やアメリカでの人脈の豊富さからして、その同化に成功している。
- ③ アメリカでヒコを受け入れてくれる友人がいる。サンダース氏のような父親的存在、ブルックのような兄弟的存在そして政界や実業界における多くの知己の存在を挙げられる。
- ④ ヒコの日本での人脈はヒコがアメリカ人としてアメリカで日本通として働くのに役立つであろう。
- ⑤ 当時の日本とアメリカを比較した場合、生活の快適さを保証する文明の利器に関してアメリカが数段進んでいた。
- ⑥ 1881年頃からヒコは神経痛に悩まされる。そのためにお茶の商売を止めたり、医者への勸

めで転地療法をしたりしている。医学の面でもアメリカに渡ればより治療効果が期待できたのではないか。

- ⑦ 日本でのヒコの生活は別に貧しかったわけではない。社会的な名士として生活できるくらいの財産はあったようだ。しかし、両親はヒコの漂流前に亡くなっているし、実兄にしても親しくしている様子はない。故郷である播磨町古宮に対する深い幻滅についてはすでに語ったとおりである。また故郷ではヒコの当時の評判はすこぶる悪かった。
- ⑧ ヒコの日本文化に対する関心はいたって低いようだ。自伝の中で日本の衣食住に感心している記述はほとんどない。13歳まで日本で育ったヒコが日本に帰って日本食を食べられる感激を表現していないのは驚くべきことである。大名によって一級の料理が提供された筈なのに、上等な日本食であったくらいの感想しかない。生活習慣もアメリカ風だったようで、和服を着て寛いでいる姿など全く想像できない。日本の伝統芸術などに対する関心も窺うことができない。

このようにアメリカへの帰国願望を後押しするような状況を列挙すると、何故帰らなかったのかと思えてくる。逆に、ヒコを日本に留める状況を列挙してみよう。

- ① アメリカから日本に渡ってきて15年も経ち、日本に生活の根を下ろしている。人間とは意外に保守的であり、なかなか生活を変えないものである。
- ② 何とんでも日本は自分が生まれたところで、日本語は読み書きはともかく母語であるので全く苦勞しない。
- ③ 日本では英語を操る日本人として、すなわちアメリカ彦蔵として名士になっていて社会的に尊敬されている。
- ④ 当時の政財界に知己が多く、その見返りを期待できた。
- ⑤ 日本にいるアメリカ人達の中に知己も多く西洋的な生活することに支障はなかった。また当時のヨーロッパ人たちが享受したであろう特権的な社会的地位は名誉心や虚栄心を満足させた。

これらの理由を比較すると、どうなるであろうか。アメリカに帰ったほうが快適な生活が待っていたように思える。確かに、アメリカで生活の基盤を作りなおすのは中々の苦勞であったかもしれない。しかし、ヒコが日本で築いた財産もかなりあったに違いないし、それは大きな障害になったと思えない。ヒコはまだ30歳の後半で働き盛りである。60歳で比較的早く逝去しているが、まだまだ動けなくなる歳ではなかった。

40歳過ぎくらいに鍔子という22歳も年下の女性を嫁にしている。自他共にアメリカ人と認めるヒコが日本人と結婚したことは意外である。日本には適齢期の外国人の女性が少なかったのだろうか。日本文化に興味を示さないアメリカ彦蔵はやはりアメリカ人か英国人を嫁に貰うほうが自然ではないか。

事実が残っている。ヒコはアメリカに「帰国」せず日本の女性を妻として家庭では日本語を話しながら過ごした。

ここで、血は争えない、なんといってもアメリカ彦蔵は日本人だったのだから、そうなったのだ、という単純な考えに与しない。それは異民族との相克や共生の経験のない日本人が発想しやすい考えである。日本人という特別な遺伝子はない。日本民族の歴史があり文化がある。それは後天的なものである。

帰国に関して筆者が提出する仮説は、ヒコの英語力に関して。ヒコに関する歴史的な証言は次の点で一致している。すなわち、ヒコはアメリカ人のように英語を身に付けていた、ヒ

コの英語はまったくアメリカ人の英語であった、と。しかし、ヒコが英語に触れ始めたとき13歳を過ぎていた。現代の第二言語習得の理論から言うと、外国語を母語のように身に付けることは不可能なのである。それも脳生理学的にそのように言われている^{viii}。人間に関する知見は物理の法則のように100%正しいと断言はできないと認識した上で、蓋然的にヒコも英語の聴解は万全ではなかったと考えられる。ヒコが英語で自伝を書いたことはこれと矛盾しない。現代では、英語で論文や本を書く人はいくらでもいる。

この仮説は多くの証言と矛盾するが、他人の外国語能力の正確な査定は難しい。ヒコの同時代人の日本人が羨望を持って彼の英語力を過剰評価するのも無理はない。その上、ヒコはどのように評価されることに職業上はもちろん心理的にも大きな満足を得ていたに違いない。アメリカ人の評価も正確さの点では大同小異だろう。他の日本人と比較すればヒコが卓越した能力を持っていることは確かなのだから。ヒコの英語力をネイティブ並みと評価した当時の人たちは間違ったと考えられる。

聴解力は音韻に関係する。英語と日本語を比べると、前者は音韻が極めて複雑であり、それに比べると後者は極めて単純である。英語以外の言語と比べても、音素の単純さでは日本語は抜きん出ている。日本語話者が英語を学習の臨界期（8歳から遅くとも11歳）以降に学ぼうとする場合、英語にあって日本語にない音素を脳が識別しないという重大な困難に突き当たる。それは生理的であるがゆえに、個人の努力を超えている。筆者はこれを後天性部分的難聴と名付けた。ヒコが超人的な努力でアメリカに同化しようとしてそれに成功していたとしても、この部分的難聴という欠陥を多くの日本人と同様に抱えていたと思う。

注意したいのは、複雑な音素体系を持っている言語を母語とする者が日本語を学ぼうするときには、問題は起こらない。彼らは母語の音素の豊富さゆえに普通、部分的難聴にならないのである。それゆえに日本に来ている外国人が日本人と同様に日本語を身に付けていても不思議ではない。

この仮説に従えば、ヒコが一般人やアメリカ人には英語をアメリカ人同様に身に付けていたと見えても、実はそうではなかったということになる。そして、この言語的な障害を一番よく理解しているのが本人である。ヒコがそれを他人に言わなかったとしても不思議ではない。通訳としての、アメリカ人としての社会的地位がそれを許さなかった。しかし、アメリカでの生活は部分的難聴ゆえに苦勞の多いものに思えた。日本語の世界では難聴ではないのだから、アメリカに帰国するのは聴覚障害者になる道を選ぶことだった。ヒコはそれを拒否したのだった。ヒコが日本女性を伴侶として選んだのも同じ理由であろう。アメリカ人や英国人を妻にすることは自分を障害者にすることだった。当代一流の英語使いの看板を掲げている限り、社交においては自分の英語力に欠点があると思わせてはならないが、自宅で寛ぐときは通常者に戻りたかったのだろう。

日本語を母語とする者が学習の臨界期以降に英語を学ぼうとすると後天性部分的難聴にならざるを得ない。当時一流の英語使いのヒコも部分的難聴であり、英語の聴解には苦勞していたことが、彼の生き方をうまく説明できると思う。ヒコがアメリカに帰国しなかった主な理由は英語力の不完全さにあった、ということになる。

ヒコは帰国して間もない頃、日常生活において英語で不自由しないが日本語では不自由すると書いている。しかし、日常生活で不自由しないこととその言語で遊んだり楽しんだりすることとは違う。どんな言語にも言葉の発音を利用した遊びがある。駄洒落とかコントとか言うもので、生活の潤滑油として欠かせないものである。部分的難聴ゆえにそのような遊びに参加で

きないのは寂しいものだ。この欠点を補うために状況によって話の内容を見抜いたり、同音異義語から一語を選び出すといった脳を駆使する複雑な過程を働かせなければならない。これは大変、エネルギーを消費する疲れる作業である。英語などの母語話者が早口で話しているときなどは話についていくのは難しく、それは疎外感を生み出す。生活の快適さという点では大きな否定的要素となる。

この筆者の主張を裏付けるために現代一流の二人の英語使いの著作を引用しよう。一人は言語学者の鈴木孝夫である。彼は著作全体をとおして、日本人が外国語を母語話者と同じように身に付ける困難さを主張している。『英語はいらない?!』^{ix}という本のなかで、「ですから外国語を外国人と同じ程度に身につけなければということを、もし自分の生涯の目的にしたとしたら、その人は一生幸福になれません」^xという。それほど難しいことだと主張している。この本の中で、英米人にとっても「外国語」になるようなイングリック (Englic) を提唱し、その使用ルールを暫定的に五つ挙げている。その一つに「早口は禁止する」とあるのは日本人の聴解力を考慮してのことであろう。

もう一人は作家の水村早苗である。彼女が出版した『日本が亡びるとき—英語の世紀の中で』^{xi}は、その主張自体も興味深い。この本をとおして語られる彼女の英語体験が参考になる。彼女は父親について12歳にしてアメリカに渡っている。居心地悪さを常に感じながら20年もそこで暮らし、英語で教育を受けて大学まで卒業している。水村の英語力はヒコのそれと比較したとき、すぐるとしてもけっして劣らないであろう。しかしながら、彼女も臨界期以降に英語の世界で生活し始めた。彼女は母語話者のように英語が聞き取れないと明言していないが、それを、すなわち部分的難聴であることを前提として本を書いている、と思う。例えばこの本の中で「日本語でさえ話すのが苦手な私は、不自由な英語で話すため、毎日下書きを書くのに追われるようになった」^{xii}とか「かれのレオポルド (Leopoldo) という名が、「l」「r」の区別が曖昧な日本人の私に、豹 (leopard) を想像させたせいかもしれない」^{xiii}と書いたりしている。他の箇所でも英語が苦手だという文が出てくる。ヒコの何倍も英語で教育を受けた作家がそう言っている。彼女が意識しているかどうかは分からないが、彼女のアメリカでの居心地の悪さの一部は、この言語能力の欠陥によるのではないかと考えられる。

ヒコが何故アメリカへの帰国を考えなかったのか、という疑問に関する筆者の回答は、ヒコは周囲の人間が思っていたほど英語に習熟していなかったからだ、という意外なものである。

ヒコの異文化体験と帰国に関して考察を加えてきたが、この論考に示された論理は日本の近代化が西洋化であったことを考慮に入れると広がりを持つ。そのことに触れてこの論考をいったん終わりとしたい。

この後天性部分的難聴の仮説 (ここで仮説というのは、人間に関する知識において絶対的な法則を主張することは認めがたいという意味である。その蓋然性は極めて高い) は、明治維新における日本の西洋化の成功を説明する一つの鍵になると思う。

それは留学生の帰国の問題である。アジアやアフリカの近代化がなかなかうまくいかなかった要因の一つとして頭脳流出の問題が挙げられる。発展途上国が西洋文明を移植しようと西洋に送り出した留学生たちのかなりの部分が西洋の進んで便利な生活に惹かれて帰国しなかった問題である。西洋諸国に植民地化されて植民者の言語を押し付けられた国々では特にそれが目立つ。それらの国のエリートたちは植民者の言語を母語のように学び留学していく。多くの優秀な留学生たちは被植民者に対する差別にも拘らず快適な生活を選んで帰国しない。

それに対して、部分的難聴という不利な条件を負っているゆえに外国語が下手な日本人の多

くは帰国した。それが日本の学問全体を世界の水準に引き上げて短期間の間に日本を近代化するのに貢献した。部分的難聴であることは社交生活を楽しむ障碍にはなるが、本を読んで勉強する妨げにはならない。本の世界こそ日本人が他の国の人間と競争しても余り不利を感じなかった土俵である。もちろん語彙や慣用表現を生活の中で身に付けられる人間たちは有利だし、耳から学ぶ部分も多い。ただ、後天性部分的難聴のような生理的な欠陥が影響しないが故に、本の世界では個人の努力が実るのである。

世界的に有名な日本人の外国語音痴が、日本の近代化に貢献するという逆説的な観点が浮かび上がる。何度もやって来る英語熱も同じ論理で逆説的に説明できるだろう。（了）

-
- i JOSEPH HEKO, *THE NARRATIVE OF A JAPANESE*, edited by JAMES MURDOCH, M.A. VOL.1 and 2
 - ii 近藤晴嘉『ジョセフ＝ヒコ』吉川弘文館、1986年 p.175, pp.189-190
 - iii 土方久徴、藤島長敏共訳『アメリカ彦蔵自叙伝』（復刊本）ミュージアム図書、1998年 p.367
 - iv 同上、p.370-371
 - v 同上
 - vi 同上、pp.55-57
 - vii 同上、pp.59-60
 - viii 山井徳行「日本人学習者の聴解力の仕組み」『日本フランス語フランス文学会中部支部県有報告集』No26、2002年を参照
 - ix PHP新書 2001年
 - x 同上、p.137
 - xi 筑摩書房 2008年
 - xii 同上、p.23
 - xiii 同上、p.30

